

ふなり、

〔和字正濫抄〕展轉 こいまるび。万葉又反の字をも、こいとよめり、こやるといふも此言なり、

〔倭訓栞前編九〕こい○中 万葉集に反をよめり、反轉の義なり、こやるといふも同じ、

こいふし。万葉集に見ゆ、展臥の義也、

こいまるび 万葉集に展轉を訓じ、日本紀に反側をよめり、今いふこけまるぶ也、

こやる。こいと同じ、展轉の古語也、日本紀の歌に、こやせると見えたるを、万葉集に臥有と書、太子傳に、臥一字を用ゐたり、古事記に、つく弓のこやるといふも、弓をふするをいふとぞ、

〔古事記上〕於是大穴牟遲神教告其菟、今急往此水門、以水洗汝身、即取其水門之蒲黃敷散而、輾轉其上者、汝身如本膚必差、

〔古事記傳十〕輾轉者は許伊麻呂毘毘氏婆は多良婆の意なり、氏婆と訓べし、万葉三八丁に展轉と見ゆ、

十の廿九丁にもあり、許伊は臥伏を云て、又万葉に即反側、臥有なども多く見ゆ、假字は許伊なり、

此も万葉にあり、

〔古事記允恭〕故追到之時、待懷而歌曰、○木梨之都久由美能、許夜流、許夜理母、阿豆佐由美、多氏理多

氏理母能知母登理美流、意母比豆麻阿波禮、

〔古事記傳三十九〕許夜流、許夜理母は伏りもなり、伏を許夜流と云は古言なり、書紀推古卷、

太子の御歌に、許夜勢屢諸能多比等阿波禮、万葉五丁五に、宇知那比枳、許夜斯努禮、九五丁に、妹之

臥勢流十三三丁に、偃爲公者此外集中に、臥有と書る皆コヤセルなどあり、古今集なる歌よこ

ほりふせる佐夜の中山と云を、輿義抄によこほりくやるとある本あるよし見えたり、久夜流、

許夜流同じ、又万葉五八丁に、宇知許伊布志提、十二丁に、反側十七三丁に、等許爾許伊布之此

外展轉、反側などある許伊も、許夜理と一言の活用なり、